

資料

二〇一九年度熊本大学法学部研究教育振興会主催 講演会

トークと映像で考える「死刑って何？」「世論」って何？

法学部教授

岡田 行雄

映像ディレクター・映画監督
明治学院大学文学部非常勤講師

長塚 洋

司会による企画意図、講師紹介

二〇一九年五月一四日、熊本大学文法棟A1教室において、熊本大学法学部研究教育振興会の後援を受けて、映像ディレクターとしてご活躍しておられ、ドキュメンタリー映画「望むのは死刑ですか 考え悩む『世論』」の映画監督を務められた長塚洋さんによる講演会が開催されました。

死刑について世論調査では圧倒的多数がその存置が必要だと答えていることも、死刑の正当化の論拠として根強く主張されてきました。長塚さんが監督をされた映画は、まさにこの点に疑問を投げかけるものであり、大変興味深いものです。

この映画の上映会と長塚さんの講演は、二〇一八年に熊本県弁護士会主催で開催されたのですが、これをもっと多くの学生

達に見てもらい、その映像と長塚さんのこれまでの取材成果を踏まえて、死刑の問題を改めて考えてほしいと思い、この企画が実現することとなりました。

講演の当日は一〇〇名程度の参加者を得ることができました。その内容は次の通りです。

長塚…よろしく願います。長塚と申します。今、映画監督と紹介していただいたのですけど、実は映画監督では飯が食えないのです。そこで、ほとんどの場合テレビディレクターとして目ごろ仕事をしてますが、死刑の問題を含めて、様々なテーマを取り上げながらやってきました。

私は、文学部出身でして、現在、東京の私立大学で講義も行っておりますが、そこも文学部ですから、法学部の皆さんからすると、全くの門外漢です。その私を、岡田先生に呼んでいただいたのは、法学部出身者とは違う視点の話をするということだという風に勝手に解釈しまして、これからお話しさせていただきますわけですが、その前に、去年熊本県弁護士会主催で上映してもらった映画を見てもらいます。正直に言いますと、上映の時は、上映料をそれなりに頂くのですが、今日は特別に無料でご覧いただきます。但し、本来は五九分ある映画を二九分に短縮したものですし、さらに所々早回しをして二〇分程度で終わります。完全版は、これから福岡や宮崎で上映会をしますので、そこでご覧になってください。それでは、映画「望むのは死刑

ですか 考え悩む『世論』をご覧ください。

『映画上映』

長塚…はい、ほんとに飛ばし飛ばしですが、見ていただきました。実際五九分の作品の、ほんとに三分の一以下ですが、いかがだったでしょうか？

映画の途中で、悩みまくっている若者が出て来るときに、その辺で笑っている方もいらしたようですが、いいんですよ。ほんとにね、ああいう時の人間の感情の揺れって不思議ですよ。

私は、全国三十数箇所上映トークをやってきました。去年の熊本もその一つでした。一昨日は、滋賀のキリスト教会で上映しました。まあ、どこでもだいたい聞かれる二大質問がありまして、一つは、「あなたはなんでこんなものを撮ろうと思ったの？」というものです。もう一つは、「大前提は分かんないんだけど、映画の中に出てくるあの市民は誰？」というものです。

この点は映画の中でいま一つ説明不足になっていたのかなあと思うので、ちょっと補足しますと、あの最後に出てきたロンドン大学リサーチフェローの女性がいいますね。彼女はロンドン大学に在籍しているイギリス在住の日本人の社会学者です^①。死刑が廃止されたイギリスという国にいて日本の死刑に対する人々の意識というものに関心を持って、審議型意識調査という方法

でそれを調べようと思ったという方なのです。

それでは、この映画に出て審議に参加する人たちがどのようなように集められたかという点、最後のスタッフロールに出たのですが、国の世論調査とか企業が色々な商品を売るための意識調査とかでも使われているプロの調査会社が事前に人々を募集するのです。だから、その中には色々な人達があります。学生さんといえば定年後に結構時間に余裕のある年配の人とかもいます。そうした方たちがいっぱい来るわけです。

一応アルバイト代を払います。やってみたいですか？「アルバイト代が出ます。二日間で二万円」などと募集するのです。但し、この調査会社がちゃんとやってることがあります。死刑がテーマとなる場合、みんなで死刑を議論しますって言うのと、来る人ってどういう傾向になると思いますか？やはり死刑について日頃から意識している人が多く集まり、「死刑はどっちかって言ったら良くないんじゃないの？」とか「死刑に対して疑問だなあ」という人ばかりが多く集まることになりかねません。しかし、既に映画で見ていただいたように、現実の世の中では七割、八割が死刑に賛成ということが過去一〇年来ずっと続いてきたわけです。そこで、調査会社は、最初に、先ほど皆さんに配ったようなアンケート（資料1参照）を使って死刑について五段階で聞きまして、そのアンケートへの回答を踏まえて、ちゃんと現実の世の中の比率に近づくように参加者を調整しています。つまり、死刑廃止すべきだと回答する参加者ばかりが

多くなり過ぎないように調整して、映画に出てきた議論の場所に呼び集めているのです。

従って、日本の世の中の普通を非常によく反映したバランスで集められた人たちがあそこで議論に参加しています。ちなみに、先ほど、皆さんに書いてもらったアンケートを集めてざっと見せていただきました。法学部の学生さん達なので、死刑に疑問という方も多少は多いかなと思ったのですが、それほど世の中の比率と変わらないですね。皆さん、日ごろ、死刑ってあつていいのかわ悪いのかと考えたことがありますか？まあ、あまり考えたことがないという人のほうが多いのかもしれませんが。そこが、実はポイントなのです。

先ほど紹介した、私への一番多い質問のもう一つ。つまり、「あなたはなんでこんな映画を撮影したの？」という点ですが、ここで、ちょっと自己紹介と絡めてお話しします。私は、若かった平成の初めの頃、現役のテレビディレクターでした。結果として、自分で好んでなったわけではないのですけれども、事件報道の専門の立場につけられて、テレビの番組で、毎週毎週のように事件の取材をしていました。月のうちの何回も殺人事件の被害者遺族のところにいったり、場合によっては加害者の家族を見つけて話を聞いたり。まあ、みなさんそういうものを見る機会がありますよね、テレビとかで。私はそういう取材をずっとやってました。

取材していて、「そんな人は死刑だ」みたいなことを言われ

るのに対して、自分の中では、人を殺した人を殺す、うーんどういうことなのかなと、ずっと自分なりの疑問は持ちつつも、まあ、被害者が望むことだからしょうがないかなと思っていました。皆さんもお分かりの通り、事件直後の被害者遺族の中には、同じ目に遭わせてやりたいみたいな言葉を平気で言う方も多いです。実はそうではない方もいるのですが、どうしても、そういう意見が表に出ます。

私も自分で報道する立場ながら仕方ないのかなと思っていたのですが、九〇年代の初め、つまりほぼ平成の初めのころ、死刑が日本で全く執行されていない時期が三年間あったわけですね。皆さんの記憶にはもちろんあるわけではないでしょうが、とにかくそうした時代がありました。それはなぜ実現したのかということが色々と言われてますよね。やっぱり天皇が変わってちょっとすぐには死刑をしにくかったんじゃないかと、あるいは、みなさんもご存じかもしれませんが、ちょうど国連が死刑廃止決議というのを挙げた時期でもあります。ヨーロッパ各国もほとんど全部死刑を廃止してしまい、アメリカでも盛んに死刑廃止の議論がなされていた時期でした。

それもあるって、このまま日本も、もしかしたら死刑廃止などという風にも言われていました。そうした時に我々はいつも当事者を取材していましたが、うちの番組の特集で被害者遺族たちに話を聞いてみようか、まあ、リサーチして番組を作ろうかということになったのですが、結果としては、電話で、被害

者遺族に話を聞くというリサーチだけで終わって、番組として放送するには至らなかったのです。でも、そのリサーチ担当が私がやりまして、何人かの被害者遺族に話を聞きました。そのご遺族の立場は、自分の大切な人を殺された、そして、殺した者には、もう死刑判決が下されて、それが確定しているけれども、当時の日本では死刑執行が止まっているからその者への死刑は執行されないかもしれないものです。どう思いますか？私の映画のタイトルみたいに「望むのは死刑執行ですか？」という質問を電話でしました。すると、ちょっとだけ意外な展開になってきたわけです。こちらが電話で、「死刑を望みますか？執行されて欲しいですか？」と尋ねたところ、「いや、それはちょっと言えない。」というお返事でして、そこで、「えっ、えっ、どういうことですか？」と、こっちが聞き返したわけです。すると、「いや、ちょっと言う色々。」と言葉が途切れます。こちらら食い下がります。取材ですから、「色々っていうのはどういうことですかね？」とさらに尋ねます。これに、その被害者遺族の方は、「言うとなんか色々言われるんで。」。それについてにはっきりと断言しようとはしないけど、言っていることは明らかですよ。本当はもう死刑執行を望まないって言いたいだけども、それを言うとなんか被害者遺族が色々と言われる。例えば、「被害者遺族なのに、自分の大切な人を殺されとて、死刑を望まないのか」とかですね。

先ほどご覧いただいた映画には、原田正治さんにも登場して

いただきました。弟を殺された被害者遺族のお一人です。原田さんは、弟さんを殺害した死刑確定者の謝罪を受けているうちに、ご本人がカミングアウトしてテレビなどに出てきて、私は死刑執行を望まないのだと、法務大臣に直訴に行ったりした方なのです。それを当時のニュース番組等でも伝えたりしまして、どのようなことが原田さんの身に起こったかと言いますと、彼のところにカミソリが送られてきたそうなのです。そういうことが起きます。

日本で、死刑などの重い刑罰を言い渡す判決文には、よく、このカミソリを送ってくる人が持つような感情を表す言葉が出てきますよね。それが社会感情です。それでは、この社会感情とは何でしょうか？ここに、一〇〇人くらいいて、みんな感情は違うのはずなのですから、そのようなバラバラな感情を社会感情と言うのでしょうか？あるいは、社会をコントロールする法に感情があるということでしょうか？法に感情などあるのかなって思うのですけれども、結構判決文でこの言葉を見るのです。ともあれ、この死刑を望んでいるのは誰なのでしょう？その事件の被害者遺族が望んでいないのであったならば、誰が望んでいるのかという問題になってきます。死刑を望んでいない原田さんや私が電話で聴き取った被害者遺族の方ではありません。なお、死刑を望まないことを示唆した被害者遺族は一組だけではありません。そういう反応があったのは、全員とも言えないけれども、決して一組だけではないということをよく

よく考えてみてほしいと思います。

私が私の大事な人を殺される、その時は同じ目に遭わせてやりたいと思うでしょう。例えば、今夜、私と岡田先生がお互いに相手を侮辱しあう大喧嘩をして絶対ぶつ殺してやろうと思ったとして、それから一週間経つと、あそこまでかっとなくなって良かったかなとか、一年経つと、「お互い大人気なかったですね」とか、人間の考えは当然変わるものです。大事な人を殺されたら、その時は、殺した者を同じように殺したいと思うかもしれません。それでは、五年経ち一〇年経ち、さらには一生そうした感情を持ち続けられるでしょうか？そうした感情は被害者遺族である御本人にとつてすごく重たいものですよ。ご本人にとつて傷になりますよね。もしかしたら、死刑を望まないそうした被害者遺族の方々に対して、私たちは、特に報道に携わっていた私などは、二次被害を与えているかもしれません。そうした感覚を持ったことが私の始まりでした。

それでは、死刑の世論とは何なのでしょう。世論が支えている死刑。死刑は私たちが支えている形になっているのですよね。聞かれたからしうがなくて、なんとなく死刑賛成に○をつけましたけど、ということじゃなくて、国民の総意として行われているわけです。

法務大臣が死刑執行した後の会見を見ることがありますか？最近、テレビも、ポピュリズム化というか、視聴率を取れないものをあまり放送しないので、だいたい死刑執行は午前中なの

ですが、その場合、NHKの昼のニュースには必ず法務大臣の記者会見が流されるけれども、夕方のニュースでちよつと流されて、夜の「報道ステーション」になると、もう流されないという状況です。よほどの有名な死刑囚じゃないと死刑執行のニュースが流され続けることはありません。もちろん、有名な死刑囚というのも当事者に見てみたら失礼な話なのですが、そういう風に捉えられてしまうのですね。そこで、その法務大臣の会見をよく聞いてみると、と言うか、毎回聞いていますと、ほとんどその会見の台詞はコピペなのです。「国民の大多数が重大な犯罪に関しては死刑を望んでいるという現状に鑑み」という部分は多分コピペで法務省の官僚の方が毎回毎回同じ物を渡していると思います。ほぼ同じです。つまり、その死刑確定者が死ぬのは我々のせいなのです。

一昨日キリスト教会で話した時に、この場にクリスチャンの方がいらしたら、不遜に聞こえるかもしれませんが、私は全然クリスチャンではないのですけれども、福音書の話をしました。私が福音書。信者ではないのですが、読むと、なかなか色々興味深くて好きでして、それに出てくる死刑に関する次のような話をしました。イエスを磔にする最後の決定をするピラトというローマの占領軍の親玉は、そもそもキリストのような誰も殺していない者は死刑にしたくなかった。ローマは、当時ギリシャから引き継いで、民主主義を始めていまして、だからピラトは、ユダヤの民衆を法廷にたくさん入れて、キリストではなくてバ

ラバという、反乱で人を殺した者を死刑にしませんかと提案するのですが、ユダヤの人達は、バラバを釈放してイエスを死刑にしなさいって言うのですね。これは、世論の暴走とでも言うべきことでして、イエス・キリストは、その一週間前に、「占領されているローマに救世主イエスがやってきた。パンザーイ」ともてはやされた人なのです。ところが、どうもイエスはみんなを失望させたらしい。汝の敵を愛せよと言って。それで民衆は、反乱軍の親玉を釈放してくれ、テロリストのトップを釈放してくれと言うのです。世論は逆に流れます。そして、そのピラトは何と言ったか。水桶で自分の手を洗って、キリストが流す血はあなたたちの責任であって私の責任ではないと言うのですよ。法務大臣の会見と一緒にしよう。法務大臣は、自分に責任があるのではなく、皆さんに責任があるのだと言っているのです。

つまり、我々がその世論で死刑を支えていると法務大臣はおっしゃるのですが、実は一つ面白いことがあります。死刑存置を求める世論は全体の八割でほぼ止まっていると言いましたが、実は昔はもうちよつと低くて、六割だったり五割ちよつとだったりした時期がありました。それが八割に高止まりしたきっかけは何なのか皆さんご存知でしょうか？でも、ほとんどの人は生まれていないからご存じないかもしれません。それは一九九五年のオウム事件。と言っても、これはちよつと正確な言い方ではないです。オウム事件の一番最初はまさに平成の初め一九

八九年には起こっています。坂本弁護士一家が失踪しました。結果として殺されていました。これが最初です。けれども、世の中が大騒ぎしたのは一九九五年の地下鉄サリン事件です。この事件で、教祖の麻原彰晃こと松本智津夫ほか、大量に逮捕され、裁判にかけられることになりました。そのきっかけとなったのが一九九五年。ここから厳罰を求める世論というものがどんどん強くなっていって、ジリジリと死刑存置派の割合が上がっていき、二〇〇〇年ごろにはもう八割に上がってほぼ止まるということが起きました。ところが去年違うことが起こったんですよ。知っている人います？知っている人がいたら自慢げに手を挙げていいですよ。去年違う数字が出たの知ってる人。いらっしやいませんか。ご存じだと思いますが、去年の一三人の大量死刑執行を皆さんはどう思いましたか。どんな気分がしました？ちよつと皆さんに聞いてみましょう。それでは、前でもいつもずっと目を合わせてくれる彼。どうぞ。

学生A…自分はちよつと大量執行については知らず、去年あたりから社会情勢などを、法学部生でありながら知らなかったんです。それに、もともと自分はちよつと死刑反対派なので。すみません。

長塚…それでは、後ろにいますと安全だと思っていたりするかと思うので、後ろの学生さんに行きましょう。どうですか？大

量執行のニュースは知ってますよね？えっ。答えたくない。熊大の法学部生はこんなにシヤイなのですか？みんな(笑)？分りました。また後で質問しますので。

先ほと言いましたように、日本の死刑はひっそりと執行されるのです。気が付いたら、朝、法務大臣が死刑執行をした旨の記者会見をしている。それも、見逃す人は見逃す。今、学生さんが法学部でありながらって言っていましたけれども、法学部生ですらピンとこない人が結構いるのだとしたら、ほんとに普通の死刑はひっそりと執行され、法学部生であつても気が付かないということがありえます。これは不思議なことの一つなのです。死刑を続けるとしたら、その意味のうちの大きな一つは、抑止効果と言われています。このような重大な罪を犯したら死刑にされてしまうから、例えば凶悪な殺人をやめようとすると抑止効果です。だけどひっそりと死刑が執行されていて、実際に殺されたかどうかよく分からないということは、この抑止効果があるのかという疑問が湧くわけです。

この抑止効果というものが、そもそもあるのかという議論がなされているのはご存知かもしれませんが、刑罰の抑止効果を証明するのが難しいという中で、ひっそりと死刑を執行しているということはこういうことなのでしょう。北朝鮮の公開処刑が残酷だと言われています。しかし、実は昔は全部そうした執行のやり方でしたよね。日本の江戸時代もそうだし、フランスのギロチンとかもそうですね。それは抑止効果のためにやっ

ているから、別に問題はなく、むしろ見ていただくのが当然みたいなのロジックだったと思いますが、密室で執行するとなると、この狙いは無視されているのではないかとということです。

抑止は今言った通りな状況があるわけですが、先ほどお話しした、八割ですつと高止まりしていると言いました死刑存置の世論は、去年、オウム事件の一人の死刑を次々に執行した後、NHKと毎日新聞の世論調査がなされたのですが、NHKでも毎日新聞でも六割に減りました。覚えておいていただきたいことは、皆さんにお配りした先ほどのアンケートは五段階で答えられるようになっていますが、実は国の世論調査はそうではないのです。国の世論調査の問いは、死刑は廃止すべきだ、または死刑はやむを得ないというものでして、ずるい感じがしませんか？やむを得ないという答えを選ぶ人は、悩んでいる人でもあるのに、これを取りあえず、「やむを得ない」に引つ張ろうという意識がちよつと感じられますよね。死刑を続けている国だからでしょうか。

より正確に、NHKが尋ねた表現を使いますと、存続すべきが五八％。平成以来、特にオウム事件の騒ぎ以来、初めて存続派が六割を切った。それでは、死刑を廃止すべきという答えが増えたのかというと、実は増えていない。何が増えたのかというと、どちらとも言えないという答えが増えたのです。

先ほども言いましたように、国の世論調査には、実は、「どちらとも言えない」という選択肢はありません。けれども、

「どう言われてもなあ」という人が、あえて自分でどちらとも言えないって書いた人がちよつとだけいるみたいですけどね。

一人も死刑が執行されました。知っている人は知っているでしょうが、井上嘉浩や中川智正という元幹部が、外部にいる、化学兵器についての学者と交流していたり、その他に、「あいつは言っていることが違うと」ということで再審請求をしようとしたりなど、死刑囚のキャラクターや人柄がずつと伝えられました。それが去年の三月に東京拘置所から移送され始めたのです。全員、東京で捕まっているから、死刑が確定してからも、ずつと東京拘置所にいたわけですが、その中から大阪拘置所、名古屋拘置所、仙台拘置所、広島拘置所に移送される者が出てきました。それって、もう今にも死刑執行する準備ではないかということと世の中がかなり緊張しました。そして当日、「今執行が始まりました。次は二人目です。次は誰です」というシーンを見る人は見たわけです。あるテレビ局などは、「この人終わり」みたいなパネルを貼ったので、ちよつと「さすがにそれはひどいんじゃないの」と、後でそれは批判されましたけど、それによって多分こうした現象が起きました。ほとんどは死刑存置から廃止すべきには行かないで、多分「どちらとも言えない」に二割方の人々は移動してしまう。「え、このまま賛成していいんだらうか」という、私の映画の中でも出てきましたが、ああやってよく分かってしまうと死刑賛成のほうに○ができなくなってしまうという方々です。そうした人の一人として、

髪型がもしやもしやのおじさんがいましたね。そういう人が少なくとも二割はいる。情報を知るとそうなるのです。

皆さんにお配りしたプリントは、私の知り合いの共同通信の記者が書いたものです。いくつかの地方紙に載ってます。熊本の新聞に掲載されたかどうかは分かりません。共同通信だからローカルペーパーに載るわけですね。それから元の文章も配っています。あとでゆっくり読んでいただければいいのですが、要するに何を取り上げているかと言いますと、この写真に載っているおじちゃんはアメリカのテキサス州の記者でして、テキサス州はアメリカで死刑が最も多く執行されています。テキサス州一州だけで年に一〇人とか執行されます。要するにほとんど日本一国と変わらないくらいに死刑が執行されているところなのですが、日本とテキサス州の間には一つ大きな違いがあります。このテキサス州の記者さんはAFP通信社の人なのです。日本でいうと共同通信みたいな、要するに通信社の記者で、もうおじいちゃんになっていらっしゃるのですが、この人は、四十何年間死刑執行のたびに、その死刑が執行された部屋に入って取材していらっしゃるのです。

日本でそんなことありますか。日本では全部法務省からの発表です。下手したら、本当に執行されたかどうかはわかりません。もしかすると、死刑確定者を変装させて裏から逃がしたかもしれない。それも誰もわからない。でも、記事には確か書かれていないのですが、わたしがこの佐藤記者から聞いたことが

あるのは、アメリカの場合、「AFP通信は現場にいらつしやいますよね」と刑務所側から死刑執行について連絡が来て、念押しされるのだそうです。なぜなら国民の命を権力が奪うことについてはそのすべては国民に明らかにされてないといけないので、その法が執行されるにあたっては、その執行はオープンにされなければならないのです。

これをあまりに色々と言うと、長塚つて人は偏った人だと言われてしまいますけれども、オープンにしないでいいのだという文化が、とかくこの我々の国では色んなところで幅を利かせて問題を引き起こしているような気がしませんか。こうした違いがあった上で、わたしは日本で死刑に賛成だと言う人がいるとして、先ほど取らせてもらったアンケートで、多分、この中でも六割七割の人は賛成またはどちらかという賛成だと思うのですが、それはそれでいいと思うのです。ただ知った上で賛成ということが大事だと思います。知った上で言ったからには、知らせてもらわないといけません。しかし、国が発表しないのだから、わかりません。確かにその通りです。だから、なぜ発表しないんだと言っていく努力も市民には必要なのです。これは死刑だけの問題ではないと思います。自分が死刑を執行させたと思っている若い人たちはそんなに多くはないでしょう。でも、例えば被害者遺族になったときにどう救済されるか、あるいは戦争になったときにどう巻き込まれるかというのは、もう起こりうる話ですね。そういう時に国に対して、権力に対

して情報を明らかにしてほしいと求める力というのはとても必要だと思います。

アメリカでは、今でも、すぐに死刑に関する情報を見ることが出来ます。テキサス州の刑務所のホームページには、英語ですけれども、死刑囚が最後に何をしゃべったかということまでちゃんと書き起こしてあるんですよ。興味ある方は是非どうぞ。なかなか面白いですよ。それが日本にはありません。だから、日本では本当にどういう状態で死刑確定者が死んでいったのかが分からないままです。例えば、松本智津夫氏が最後に、彼を最も否定していた四女を遺骨の引き取り先として言い残したと法務省は主張していますが、彼が本当にそう言ったのかどうかはわかりません。もしかすると、法務省が、三女と対立している四女に指定するという作為を敢えてしたのではないかと疑われていますが、それもわかりません。松本氏の他の家族は、松本氏と最も反目していた四女を遺骨の引き取り先に指定するということとはありえないとおっしゃっているのですが。アメリカであれば、そういうことは起こりません。新聞記者も刑場に入っているのですから。これを例えて言うならば、ヘラルドトリビューンやニューヨークタイムズや地元の新聞社が来なくても、AFP通信だけは来いよと執行する側が誘うという構造になっているのです。これを日本で言えば、朝日新聞が来なくても産経新聞が来なくても、共同通信は来いよって言われて、黙々と共同通信の記者が死刑執行の様子を自分の目で見て書いて送ってくる

ということになっているのです。

死刑執行を続けるのであれば、アメリカのようであってほしいと思います。それから、私は死刑賛成を言うのなら、これだけは守っていただきたいといつも皆さんに言っています。それは、死刑に賛成する理由を被害者のせいにしないで欲しいということですよ。ここで被害者を理由に持ち出すならば、死刑を望まない被害者遺族は二重の被害者となるのではないのでしょうか。弟さんを殺害した死刑確定者の死刑執行を望まなかった原田さんは、結局、その死刑確定者が処刑されることで、二重に被害を受けたわけです。彼は、今では殺人犯に対してよりも、国に対する不信任の方が強いのです。私は文学部出身者として、あの社会感情だとか法感情だとか言われる感情はとても大事だと思っています。感情は尊重されるべき人間の尊厳の一部だと思いのですけれども、それを一面的に捉えて、それで他者の権利や命を左右するということが制度としてどれだけ正しいのかということとは、常に疑問に持ちながら皆さんが司法というものを考え続けていただけたらと思う次第です。

それでは、そろそろ何か質問がある人はいらっしゃいませんか？感想でもいいですし、ちょっとこれがわかりづらいみたいな話でもいいです。どうでしょうか。

学生B…感想でもいいですか？

長塚…はい。いいですよ。もちろん。これは市民型意識調査の一部だと思ってください。色んなことをみんなで勝手に言ってお互いに否定しない。そういう形で進めていきたいと思えます。

学生B…私は死刑の制度には賛成派だったのですが、やはり世論として、どちらかというと死刑賛成の人が多いということを見て、重い罪を犯した死刑囚はその死を以て償うのが当たり前だ、それが正義だ、みたいな感じの思考をしているのはちょっと思考停止というか、そういうふうに決めてる人もいるのかなあと感じましたし、私もそういう点でちょっと思考停止しているのではないかなとちょっと気づきました。

長塚…あなた自身は、だからそういう犯罪者はそういう刑に遭って当然だというのが一番強い感じですか。

学生B…そうですね。

長塚…なるほど。自分は違うという方は他にいらっしやいませんか。そうは言っても、被害者はどうすればいいのという方は？

ちよつと今のお話に関して言うと、密室で死刑が執行されている以上、ちよつとすでに怪しいと私が感じているものが抑止

効果です。果たして死刑に抑止効果はあるのでしょうか。これは、もしかしたらご存知の方も多いのかもしれないけども、実際の殺人を犯す人がその場面になった時に、本当に冷静にこれをやると自分の命が五年後十年後に取られるからやめようと思うかどうか、そういうシチュエーションになるのだろうかと思います。我々はそういうシチュエーションにはいないからそんな目に合うんだったらやめたほうがいいねとなります。我々は計算できる状況にあるからです。でも、人を殺すかという状況というのは、そういうことは計算できない状態なのだと思ったほうがいいのではないのでしょうか。

逆に、今度は変な正常性バイアスがかかってしまっていて、自分は絶対捕まらない、あるいは、自分は正しいことをしてるから死刑にならないという考えに凝り固まってしまっている場合も抑止効果は働きません。あの相模原事件で被告人となっている植松さんは、私は釈放されたらもっと役に立つんだと言うわけですが、一つの精神の病があるのではないかと思うのですけれども、その精神の病が殺人に駆り立てているとすると、やはり抑止効果は社会学的にも心理学的にも怪しいということになります。

そして、被害感情は、先ほども言いましたように、私はこれを死刑存置の理由にすることは本当に間違っていると思います。死刑存続を望む方は、最終的には応報の是非で議論していただくのが一番いいのかなと思います。つまり、応報であれば命を

取っていいのだ、いや応報であつても命を取るべきではないのだということ。死刑というものは、やはり、その殺した者の命を取るわけですから、その生命に対する感情が非常に働くと思います。言うまでもないと思いますが、目には目を齒には齒をと言ふと、なんだか野蛮だなという印象があります。そこで、現代の刑罰は、私が誰かの目をつぶしたとしても、私は目をつぶされないので。その代わり、懲役何年という刑罰を受けることになるでしょう。ところが、死刑だけは例外です。命を取った者の命を取る。こうした刑罰は死刑だけです。多分この死刑の在り方を支えるものは、そういう社会感情と言ったところにあると思います。命に対しては命。ここだけは強い。目には目を、に対しては、皆さんはピンと来ないのでしょうが、命には命と言われると、ピンと来てしまうという社会感情がおそらくあるのでしょう。とにかく応報というものが最後に残る強い死刑存続の根拠になるのかなと私は思っています。他にご意見やご質問はありませんか？

学生C…自分はどちらかというと死刑は賛成なのです。それは先ほど抑止効果は証明できないとおっしゃいましたが、少なくとも一般人にとっては、一応効果はあると思うのです。もちろん、犯罪を犯そうとする心理状態の人にとっては数年後自分が死刑になるということはどうでもいいことなのかもしれないですが。ですから、やはりオウム事件の教祖みたいに再犯を犯し

そうな人を社会にのさばらせておくというか、放っておくのはちょっと危険かなあという感情があるので、(死刑存置に)賛成ですね。

長塚…今、大事な問題提起が一つありました。社会にのさばらせておくというのが、これも実は二つの側面があると思うのです。現実的にそういう人が社会で活動してはとても困るのであれば、終身刑にするだけで絶対に社会に出さなければいいのです。でも、多分、人間の感情の中にはそうではないものもあるのですよね。そういう人がこの世に生きてることが怖い。そういうニュアンスもあるかと思います。だから、終身刑じゃなくて、やはりこの世から消えてもらわないと困るという考え方はあつて当然というか、これは長い歴史の中でずっとあったことなのです。やはり、凶悪な犯罪を犯した人というのは我々にとつてモンスターとして我々の心に映るので、それを取り除くことで安心感が生まれる。それを、私は、感情として別に全否定はしません。ただ、そのことによる再犯防止効果がどれだけ強いかわかるのは、私はちょっと疑問に思うところなのですけど。

再犯防止を言うのであれば、そのモンスターが実は我々と同じような人間だったかもしれないのに、なぜそのモンスタリーな犯罪に走ったのかということを、やはり本当は報道する側が、松本智津夫という人が、なぜそうなつて行つたのか、ある

いはどういう素質を持っていたのかということを解明することと同時にやらないといけないのではないかと思います。そういう意味で、私は死刑執行を全部否定はしませんが、その前にまずそうした事実の解明をやったほうがいいでしょう。しかし、今の司法制度は多分そこを重視していないと思いますし、そういうことを含めた上で死刑の是非を考えたほうがいいのではないかと思います。いずれにせよ、先ほどのご意見は大事な問題提起だと思います。

学生D…自分は、もともととは死刑に賛成だったんですけども、一回、自分でゼミのレポートで死刑について書く機会があって、抑止力が実際にあるのかという問題について考えたところ、先ほどおっしゃった通りで、自分も死刑を執行したことで犯罪とか殺人が減るかと言われたら、おそらく、証明されていないというのもあるから、そう断言することは難しいのではないかと思います。どちらかと言えば、今はどちらともいえないと言いたいのですけれども、賛成ではなくて、反対派に気持ちは傾いています。少なくとも、今は反対のほうに自分は傾いている気がします。犯罪とか殺人をしたその時にその瞬間を切り取れば、その人が悪いと思うのが当然なのですから、その人の生い立ちとか小さい時にどういう生活をしていたのかとかに目を向けたら、一概に、人を殺したから死刑に処していいと言っているのかなというのは自分の中ですごく感じています。当人

ではないから殺された被害者の気持ちになるというのは、その立場に立つことが難しいとは思いますが、やはり罪を犯した人を殺したところで、その人に殺された人は帰ってこないし、その殺す罪を犯した人は生きて罪を償うべきなのではないかと思いました。

長塚…ありがとうございます。率直に悩んだプロセスを話していたことに感謝します。でも、たぶん、そうやって無理に廃止に走らなければいけないわけでもないと思います。大事なことは、普通に賛成ですと思っていたことを、自分で調べて、学んでみて、それで良かったのかなと気づくことです。これは、死刑に限らず、本当にそうやって自分が当たり前だと思っていることを疑う力が本当に大事になってくるような気がしています。特に、この時代では。

今のご意見の最後に、殺された人本人の気持ちの話が出ました。これも、私は当事者をたくさん取材してきたから、もちろん殺されたご本人から取材はできませんが、結局、遺族がこんな目にあつたのについて思うのですけれども、遺族が途中で変わることも、ある遺族の一つのパターンとしてあります。つまり、御遺族が、殺されたうちの大事な人は本当に相手が死ぬことを望んだらどうかという疑問を持つ場合があるのです。この疑問への答えは出ません。だから本当に遺族としては苦しいのです。オウム真理教に属していた死刑確定者であった一三人の執行

は、あたかも平成のうちに平成の事件を解決するということがあるのかのように言われました。いえいえ。御遺族にとつてはあの一三人が執行されても何にも解決していないのです。何も変わらないのです。そんな簡単に癒されることではないと思います。それでは、被害者に対してどうしていいのだろうかということは、今日のこの時間に全部語れることではないのですが、皆さんのように、司法について勉強される方々はちよつとそこも併せて考えていただけたらと思います。つまり、被害者はどうやったら救われるのだろうか？ 傷ついた被害者の癒しはどうしたらいいのだろうか？ こうしたことも考えて欲しいのです。

坂本堤弁護士一家が殺された経緯を、皆さんがご存知かどうかわかりませんが、当時のオウム真理教に若い人達がほとんど入信して、そうした若い人たちは、いわゆるマインドコントロールを受けたというか、その教団が正しいと信じさせられて、自分の家のお金を持ち出したりして、御家族と連絡を絶つてしまふわけです。少なくとも、そういうことは怪しからん被害であるということで、坂本堤という若い弁護士が、オウム真理教と戦い始めたのです。その結果、坂本堤さんは殺害されるのですけれども、オウム真理教の信者達の手違いで、結局、坂本弁護士のお奥さんとまだ当時一歳の赤ちゃんを含む家族全員を殺害することになってしまいました。とんでもない話です。絶対に赦せない話ですよ。ただ、坂本さちよさんという坂本弁護士のお母さんは、実は、この死刑執行が去年なされた後のコメントで、

死刑が執行された時に死刑で当然だという気持ちはずっとありますとお話しされた上で、ただ、たとえオウム真理教の信者達であつても、死刑は嫌だなあと思うこともおっしゃっていらつしゃいます。問題は、報道機関の半分くらいは、この後半の部分を報道していません。つまり、我々が期待する被害者像みたいなものがあつて、これにじっくりこない被害者等のコメントがあると、報道機関はその部分をカットしてしまうのです。ここもちよつと注意して欲しいのです。メディアの報道を全部一生懸命見るようにすると、その中に見つかったりしますけれど、一つのメディアだけ見ていると、こうしたコメントに気づかなくなってしまうこともあります。メディアも人々が期待する被害者像みたいなものに即して報道してしまう。

そこで、坂本さちよさんがなぜそう言ったかというのは、私はさちよさんにずっと寄り添っている弁護士さんと話をしたことから、その理由を知っているのですが、坂本堤弁護士とその妻の都子さんは本当に人権派というか、弱い人たちのため、苦しむ人たちのため、その心に寄り添って生きてこられて、障がい者支援のボランティアもやっておられた、その彼らが人の死刑を望むとはどうしても思えないということにあります。最後は、正直なところ、非常に厳しい言い方になるけれども、やはり、それは御遺族の思いに過ぎないのではないかと疑問が拭えません。死んだ人の気持ちを明らかにすることはどうしてもできない。だから、話はもう一回そこに戻るんですが、その

傷ついた被害者、殺人の場合だと、被害者遺族をどう癒しているのかというのが我々みんなの課題になるだろうと思います。

学生E…去年のオウム真理教に属していた死刑確定者の死刑執行で、実況中継みたいな感じで報道がなされたというのは、メディアが国民というか世論がそういう報道を喜ぶというか、望んだという風に捉えて、そのような形の報道をしたということなのでしょう？

長塚…なぜ、ああいう報道がされたかということですよ。

単純に私の立場で容易に言えることは二つあると思います。おっしゃる通りで、あの人たちが執行されることについて国民は知りたいだろう、他の死刑囚に関してはもう事件も何となく忘れていて、あまり知りたいというニーズがないだろうという風にメディアが考えたことがあります。そのことをちよつと批判的に感じになることは、やはり日本のメディアが持つ一つのポピュリズムみたいなものが非常に強くあるのかなあと思います。ただ、実はもう一つもっと大きなものがあります。日本では行政、つまり権力は、自分にとって必要な都合のいい情報しか流さずに、それが発表報道という形を取ります。ですから、先ほど言いましたように、本当にあの一人三人が執行されたと発表されても、遺体が出てこないものに関しては確認できない話なのです。先ほどご紹介したアメリカとは全く違う話です。発表報

道なので、法務省が明日やるぞ、今一人やっただ、次一人やるぞと言うと、視聴者や読者は見たい、知りたいという状況になる。そして、それを国が順番に出してくれるから、そのままそれを流してしまうということになります。この点については、やはり、考えなければいけないのは、メディアというものが本当に自分のモラルとかポリシーなしに、国がこういう発表したから、それをそのままに報道するということでもいいのかどうかということなのです。

実は、このことは死刑だけではなくて、冤罪事件でも犯人視報道がありますが、あれは要するに警察が逮捕段階で犯人だと思わせるような発表するから、それをそのまま報道すること做起こっています。司法関連については、これも古い話なので、皆さんにとってはわかりにくいかもしれないけれども、松本サリン事件という事件が、地下鉄サリン事件が起こる前年の夏にありまして、実際被害者として自分も倒れたし、その奥さんも長いこと患って亡くなれたという、会社員の河野義行さんが最初に犯人視されて、警察にすごいしつこい取調べを受けて、警察があらさまに犯人視しているものですから、メディアはわーっと群がり、「いつ捕まるんだ、いつ捕まるんだ」と騒いだのです。³しかし、それは全部警察の動きを追っただけの話です。そして、警察は、「いや彼が犯人だなんて一言も言っていないよ」と言って、河野さんが犯人視されたことの責任を取りません。でも、メディアは完全に誘導されたわけです。だから、

本当に果たして行政権力側に誘導されるままでメディアはいいのかどうかということについては、司法に関わるメディアの問題として、ちょっと考えておかないといけないことなのだと思います。

学生F…自分は死刑に賛成派なのですけれども、その理由としては、死んでしまった人はこれから人生を過ごせないわけですが、もしも死刑が廃止されたとなると、その犯罪者は無期懲役になり、無期懲役の受刑者はちゃんと三食食べられるし、人生をある程度は謳歌できるからです。聞いた話ではクリスマスとかにケーキが出るとか。そんな状態で犯罪者が生かされるといのは被害者からしたらすごくかわいそうなことだなあと自分としては思うので、応報という考えになるのですけれども、やはり、それ相応の罪の責任を負って欲しいと思います。

長塚…今のお話は被害者のことも考えての応報ですね。被害者感情というところですよ。被害者が死刑を望まない場合もあるわけですが、それでもやはり、あなたとしてはという意味で、あなたにとつての応報ということですよ。そういう意味での応報は当然出てくると思います。ただ、これは伝える我々の問題でもあるのだけれども、今日ここで、先ほど言いかけてましたが、私は、殺人ではないんだけど、放火を一回繰り返して刑務所に人生のうち五〇年入ってたおじいちゃん

を、今取材しています。「いや、そんな奴は出てこないほうがいいでしょう」と言う人も多いんですけども、やはり実際、ご本人に会って話してみると、このおじいちゃんはいいい奴で、かわいんですよ。どうしていいかわからなくなってしまうんです。こういう方だったら、ケーキどころか、色々とお菓子を食べてほしいと思ってしまふのだけれども、しかし、やったことはやったことですよ。そこで、少なくとも私の関心としては、彼はどうしてそういう犯罪を繰り返す方向へ向かったのかというところにあるわけです。そのかわいなおじいちゃんは生活力がないんですね。だから、最後はやはり応報、あるいはその反省の度合いに応じての刑罰があってもいいと思います。もう一回話は戻るけれども、それでもやはり、どこまでも裁判での審理を尽くして欲しいと、私は思う次第です。その上で死刑を選択するということは社会の在り方としてはありうると思います。

学生G…すみません。大前提にちょっと疑問があります。こんな質問をするならば、あなたは法学部の学生をやめると言われかねないような質問なのですけれども。被害者感情然り、社会感情然り、死刑の是非如何にかかわらず罪を償ってほしいと加害者側に意見を提示する人がいます。生きて罪を償ってほしいとか、死を以て罪を償ってほしいとか言われると、罪を償うって、何なんだろうなあと、今ちょっと頭の中でぐるぐる考えて

いたのですけれども、これがよくわからないのです。日本政府としては、処罰するということしか掲げていないので。

長塚…刑罰が償いですよね。ひどい目に遭うことが償いといわれています。

学生G…ひどい目に遭うのが償いになるのか、それとも被害者側が死刑ではなくてもいいと言うから、服役中に刑務作業を行うことが償いになるのかどうかというの、ちよつと何なんだろうなあ、先ほど話していただいた、衣食住も実質確保された状態での刑務作業に何十年間費やすというの、果たして償いになるのかなあと疑問に思うのです。個人の価値観に委ねるしかないと思うのですけれども、償うということは何なんだろうと思います。

長塚…私は法学部出身ではないですけれども、このテーマにもずいぶん向き合ってきましたが、答えが出ないです。償いは何だろうか？それを探し続けるというのが、たぶん私のミッションになっているなあと思います。おっしゃる通りで、先ほどのお話に出てきた、原田さんは、生きてずっと謝罪の気持ちでいてくれることが償いだとおっしゃっています。一方、松本智津夫氏は、たぶん謝罪する気持ちが起きないまま死んでいきました。そのことを不満に思つて、それを抱えていく被害者御遺族

もいらつしやるようです。これは本当に答えが出ない。ただ、やはり、そのためにも被害者と加害者の両方に我々はしつかり向き合うことが必要なのだろうなと思います。ご質問ありがとうございます。

最後に、一つだけ言い忘れたことを大急ぎで言います。この映画で伝えたかった事です。この映画は、実は廃止派にも存続派にもあまり評判が良くありません。結局、結論がわからんということなのでしょう。でも、上から目線だと言われるでしょうけれども、私にとつては、それが狙いです。わからないということを自分でわかってくれることが大事なのです。ヨーロッパの国々は死刑を廃止しました。それでは世論調査で死刑廃止派が勝ったからかと言うと、違うんですね。ヨーロッパでも世論の六割や七割は死刑に賛成だけれども、政治が死刑廃止を目指したのです。私は、フランスのケースを調べましたけれども、日本と圧倒的に違うのは、やはり、ギロチンでの死刑執行のようなことは情報公開がされます。そして、国の世論調査だけではなくて、NHKのような報道機関による世論調査がたくさんなされる。すると、国民はこの議論をずっと共有しているんです。そうすると、この映画の最後のほうに出てきた女性がついていたように、「ああそういう違う考え方の人もいることを改めて認識できました」と言う、そういう状況にあるんです。確かに、自分は死刑に賛成だけれども、国が廃止したとして、「なるほどそれも一理だね」と受け止められる。逆に、今死刑

反対なんだけど、国が死刑を存置し続けていることに關しても、「ああそれも一つの考え方だよ」という風に、お互いに相手を尊重することができる。この映画で議論をした人たちは誰もつかみ合いの喧嘩なんかしていません。「なるほどね。あなたはそう考えるんだね。でもやっぱり僕はこうなんだよ」と相手の意見を受け入れる。そういう社会かどうかということがすごく大事なんだと思っています。これも死刑に限らないことです。本当に、今日はご清聴いただき、ありがとうございます。

付記

この講演が始まる直前に、講演の出席者に対して後掲資料1のアンケートを実施した。回答数は九三。Q1「あなたは、刑罰として死刑があつた方がいいと考えますか、それとも廃止した方がいいと考えますか」の回答は、死刑存置志向のものが六一、どちらとも言えないが一四、死刑廃止志向のものが一八であつた（資料2参照）。

この講演は刑事政策の講義時間の枠で実施されたため、二〇一九年五月二八日の刑事政策の講義において死刑について講じた後に同じアンケートを実施した。回答数は九四。同じQ1への回答は、死刑存置志向のものが二八、どちらとも言えないが二四、死刑廃止志向のものが四二となつた（資料2参照）。本講演と講義を通して、死刑についての情報を得ることで、死刑に対する意見が変わり得ることを、これらのアンケート結果は

示していると言えよう。

註

(1) 佐藤舞のこと。死刑と世論についての論考として、佐藤舞「日本の世論は死刑を支持しているのか」法律時報八七巻二号（二〇一五年）六三頁以下などがある。

(2) 一九九〇年から一九九二年までの三年間のこと。一九九〇年に真宗大谷派の僧侶でもあつた左藤恵法相が死刑執行命令書への署名を拒否したことが契機となり、後藤田正晴法相時の一九九三年に執行が再開されるまでの三年四月間は死刑執行はなされなかつた。

(3) 松本サリン事件による報道被害については、さしあたり、河野義行『浅野健一』松本サリン事件報道の罪と罰（第三文明社・一九九六年）を参照。

資料 1

資 料

氏名（よろしければ）： _____ 年齢： _____

Q1 あなたは、刑罰として死刑があった方がいいと考えますか、それとも廃止した方がいいと考えますか。
（○は1つ）

- 1 死刑は絶対にあった方がよい
- 2 どちらかと言えば死刑はあった方がよい
- 3 どちらとも言えない
- 4 どちらかと言えば死刑は廃止すべきだ
- 5 死刑は絶対に廃止すべきだ

→Q2 【Q1で「1. 死刑は絶対にあった方がよい」「2. どちらかと言えば死刑はあった方がよい」と答えた人へ】

あなたは、どのような理由で死刑を支持しますか。最も重要だと思うものを2つまで選んでください。（○は2つまで）

- 1 死刑は日本の刑法で定められている一番厳しい刑罰だから
- 2 仮釈放のない終身刑が日本にはないから
- 3 死刑執行によって、死刑囚本人が再び罪を犯せなくするため
- 4 死刑執行によって、他の犯罪者が罪を犯すことを防ぐため
- 5 殺人を犯した者は自らの命をもって償うべきだから
- 6 被害者遺族の感情を考慮して
- 7 その他

→Q3 【Q1で「4. どちらかと言えば死刑は廃止すべきだ」「5. 死刑は絶対に廃止すべきだ」と答えた人へ】

あなたは、どのような理由で死刑に反対しますか。最も重要だと思うものを2つまで選んでください。（○は2つまで）

- 1 生かしておいて罪の償いをさせた方がよいから
- 2 凶悪犯罪を犯した者でも、更生の可能性があるから
- 3 死刑を廃止しても、凶悪な犯罪が増加するとは思わないから
- 4 裁判に誤りがあったとき、死刑を執行してしまふと取り返しがつかないから
- 5 死刑は私のモラル・宗教に反するから
- 6 死刑は基本的人権である生きる権利を奪うから
- 7 国家であっても人を殺すことは許されないから
- 8 その他

→Q4 【Q1で「3. どちらとも言えない」と答えた人へ】

あなたはどのような理由で「どちらとも言えない」を選択しましたか。（○は1つ）

- 1 難しい問題であり判断がつかないから
- 2 死刑について関心がないから
- 3 その他

Q5 あなたは、日本で死刑がどの方法によって行われていると思いますか。（○は1つ）

- 1 電気椅子
- 2 投薬
- 3 ガス
- 4 絞首
- 5 分からない

Q6 あなたは、死刑制度には殺人の発生を少なくする効果（抑止力）があると思いますか。（○は1つ）

- 1 抑止力があると思う
- 2 抑止力はないと思う
- 3 科学的にはどちらとも言えない
- 4 分からない

アンケート集計結果①（講演直前に実施）

回答数：93

Q1 あなたは、刑罰として死刑があった方がいいと考えますか、それとも廃止した方がいいと考えますか。（〇は1つ）

- 1 死刑は絶対にあった方がいい 14
- 2 どちらかと言えば死刑はあった方がいい 47
- 3 どちらとも言えない 14
- 4 どちらかと言えば死刑は廃止すべきだ 15
- 5 死刑は絶対に廃止すべきだ 3

Q2 【Q1で「1. 死刑は絶対にあった方がいい」「2. どちらかと言えば死刑はあった方がいい」と答えた人へ】

あなたは、どのような理由で死刑を支持しますか。最も重要だと思うものを2つまで選んでください。（〇は2つまで）

- 1 死刑は日本の刑法で定められている一番厳しい刑罰だから 10
- 2 仮釈放のない終身刑が日本にはないから 20
- 3 死刑執行によって、死刑囚本人が再び罪を犯せなくするため 10
- 4 死刑執行によって、他の犯罪者が罪を犯すことを防ぐため 23
- 5 殺人を犯した者は自らの命をもって償うべきだから 21
- 6 被害者遺族の感情を考慮して 21
- 7 その他 2

Q3 【Q1で「4. どちらかと言えば死刑は廃止すべきだ」「5. 死刑は絶対に廃止すべきだ」と答えた人へ】

あなたは、どのような理由で死刑に反対しますか。最も重要だと思うものを2つまで選んでください。（〇は2つまで）

- 1 生かしておいて罪の償いをさせた方がよいから 9
- 2 凶悪犯罪を犯した者でも、更生の可能性があるから 1
- 3 死刑を廃止しても、凶悪な犯罪が増加するとは思わないから 9
- 4 裁判に誤りがあったとき、死刑を執行してしまうと取り返しがつかないから 12
- 5 死刑は私のモラル・宗教に反するから 0
- 6 死刑は基本的人権である生きる権利を奪うから 1
- 7 国家であっても人を殺すことは許されないから 1
- 8 その他 2

Q4 【Q1で「3. どちらとも言えない」と答えた人へ】

あなたはどのような理由で「どちらとも言えない」を選択しましたか。（〇は1つ）

- 1 難しい問題であり判断がつかないから 13
- 2 死刑について関心がないから 0
- 3 その他 0

Q5 あなたは、日本で死刑がどの方法によって行われていると思いますか。(○は1つ)

- 1 電気椅子 6
- 2 投薬 2
- 3 ガス 2
- 4 絞首 78
- 5 分からない 3

Q6 あなたは、死刑制度には殺人の発生を少なくする効果(抑止力)があると思いますか。

(○は1つ)

- 1 抑止力があると思う 30
- 2 抑止力はないと思う 40
- 3 科学的にはどちらとも言えない 16
- 4 分からない 6

アンケート集計結果②(講演及び刑事政策の講義後に実施)

回答数: 94

Q1 あなたは、刑罰として死刑があった方がいいと考えますか、それとも廃止した方がいいと考えますか。(○は1つ)

- 1 死刑は絶対にあつた方がよい 10
- 2 どちらかと言えば死刑はあつた方がよい 18
- 3 どちらとも言えない 24
- 4 どちらかと言えば死刑は廃止すべきだ 36
- 5 死刑は絶対に廃止すべきだ 6

Q2 【Q1で「1. 死刑は絶対にあつた方がよい」「2. どちらかと言えば死刑はあつた方がよい」と答えた人へ】

あなたは、どのような理由で死刑を支持しますか。最も重要だと思うものを2つまで選んでください。(○は2つまで)

- 1 死刑は日本の刑法で定められている一番厳しい刑罰だから 4
- 2 仮釈放のない終身刑が日本にはないから 10
- 3 死刑執行によって、死刑囚本人が再び罪を犯せなくするため 6
- 4 死刑執行によって、他の犯罪者が罪を犯すことを防ぐため 6
- 5 殺人を犯した者は自らの命をもって償うべきだから 8
- 6 被害者遺族の感情を考慮して 5
- 7 その他 2

トークと映像で考える～死刑って何？“世論”って何？

Q3 【Q1で「4. どちらかと言えば死刑は廃止すべきだ」「5. 死刑は絶対に廃止すべきだ」と答えた人へ】

あなたは、どのような理由で死刑に反対しますか。最も重要だと思うものを2つまで選んでください。(○は2つまで)

- 1 生かしておいて罪の償いをさせた方がよいから 12
- 2 凶悪犯罪を犯した者でも、更生の可能性があるから 4
- 3 死刑を廃止しても、凶悪な犯罪が増加するとは思わないから 18
- 4 裁判に誤りがあったとき、死刑を執行してしまうと取り返しがつかないから 34
- 5 死刑は私のモラル・宗教に反するから 1
- 6 死刑は基本的人権である生きる権利を奪うから 3
- 7 国家であっても人を殺すことは許されないから 8
- 8 その他 0

Q4 【Q1で「3. どちらとも言えない」と答えた人へ】

あなたはどのような理由で「どちらとも言えない」を選択しましたか。(○は1つ)

- 1 難しい問題であり判断がつかないから 24
- 2 死刑について関心がないから 0
- 3 その他 0

Q5 あなたは、日本で死刑がどの方法によって行われていると思いますか。(○は1つ)

- 1 電気椅子 1
- 2 投薬 3
- 3 ガス 1
- 4 絞首 85
- 5 分からない 4

Q6 あなたは、死刑制度には殺人の発生を少なくする効果(抑止力)があると思いますか。

(○は1つ)

- 1 抑止力があると思う 17
- 2 抑止力はないと思う 44
- 3 科学的にはどちらとも言えない 26
- 4 分からない 7